



1994 年 (平成 6 年)
2 月 号 (No. 585)
社 団 日 本 山 岳 会
The Japanese Alpine Club
定 価 一 部 150 円

目 次

ヒマラヤを越えるツルの渡り…… 1
 自然保護随想…… 3
 東西南北
 中村勝郎さんの手紙…… 4
 チャクラギールの北面に入る… 4
 山と自然の断章 (7) …… 5
 山岳地図について…… 6
 花咲く丘に涙して…… 9
 海外の山…… 7
 山と医療…… 9
 図書紹介…… 10
 『レッツ・スケッチー山絵教室』
 『回想の山道』『山を想えば人恋し』
 『はじめてのシエラの夏』
 『韓国の岩場』『World Directory
 of Environmental Organizations』
 『日本の山はなぜ美しい—
 山の自然学への招待—』
 支部だより…… 12
 秋田支部 東海支部
 書籍・雑誌受入報告…… 13
 新入会員/住所・住居表示変更… 13
 会務報告…… 14
 インフォメーション…… 15
 ルーム日誌/会員異動…… 15

▶日本山岳会事務取扱時間
 月、火、木、土曜 10時～20時
 水、金曜 13時～20時
 日曜・祭日は休み
 ▶図書室開室時間
 日曜・祭日・月曜を除く毎日
 13時～20時

神秘としかいいようのない
ヒマラヤを越えるツルの渡り

松 田 雄 一

■初報告から三十五年……

早いもので、昭和三十三年十一月に
会報二〇六号に「ヒマラヤを越える白
鳥」を書いてから、三十五年の歳月が
経ってしまつた。

昭和三十三年秋、本会から派遣され
たヒマルチュリ偵察隊の金坂、石坂両
名は、モンズンが明けた直後の十月
五日から八日にかけて、ヒマルチュリ
東尾根で、ヒマラヤを越えて南へ渡る
大きな白い鳥の編隊を目撃した。「モ
ンズンは白鳥の飛来によって明け
る」という記事は、何とも感動的な文
章であった。

この時私の頭に浮かんだ発想は、プ
レモンズンには、逆に南から北へ渡
るはずであり、これがプレモンズン
の好天の予測に使えないか、というこ
とであった。

しかし、私の参加した翌春のヒマル
チュリでも、一九七〇年春のエベレス
トでも、ついにツルを見ることはでき
なかつた。

その後、阪大のP-29登山隊に参加
していた住吉ドクターは、ついに一九
七〇年秋、この渡り鳥の撮影に成功。
その写真からこれがツルであり、種類
はアナハツルと推定されたが、この中
にはソデグロツルも混じっている可能

性があるということでは反響を呼んだ。
一九七六年三月の日本鳥学会の例会で
は、ソデグロかアナハカということ
議論が白熱したことを覚えている。そ
の後、これは白雪の反射で白く見えた
ためソデグロツルのように見えたこと
が判明した

■続々撮影に成功し、科学的調査も

一九七六年秋には、日本・イラン合
同マナスル登山隊が、ツルの渡りを見
て好天をつかみ、登頂に成功したこと
が話題になり、この隊の田村宣紀隊長
の撮影したカラー写真は、科学朝日誌

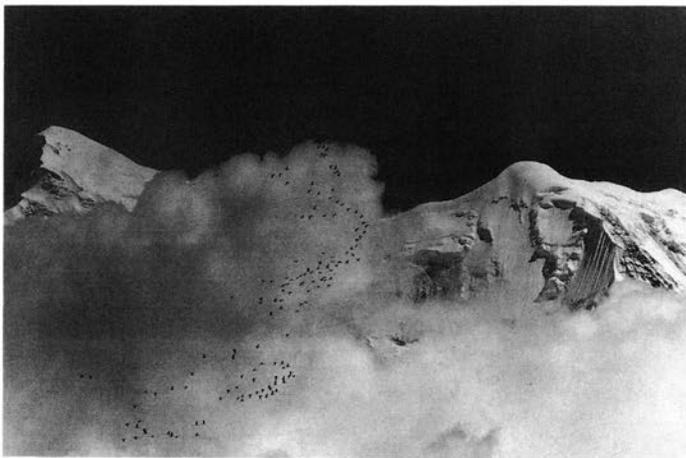
上等で発表され、これを契機として以
後一九八一年にかけ、多くの登山隊に
よりツルを目撃したという情報もた
らされた。中でも一九七九年秋にはカ
モシカ同人隊がダウラギリ山群で、一
九八一年にはイエティ同人隊の加藤保

男氏がマナスルで、それぞれ8ミリフ
イルムに収録、マナスルおよびカリガ
ンダキ渓谷では、毎年秋にはほぼ同じ
ルートを通過することが多くのデータ
から裏付けられた。

さらに一九八九年には、マナスルに
ツル撮影隊が出かけてビデオ撮影に成
功、ドキュメント番組で放映され、ツ
ルが上昇気流に乗って上空に昇るシー
ンは、映像ならでは再現できないもの
として評価された。

一九九二年秋にはNHKの「世界い
きもの地球紀行」の取材班が、カリガ
ンダキで素晴らしい映像をとらえるこ
とに成功、一九九三年の正月番組とし
て好評を博した。

なお一九九〇年頃より、日本野鳥の
会研究センターの樋口研究所長らのグ
ループは、東洋通信機で開発した衛星
追跡用小型送信機(アルゴス・システ



ヒマラヤを越えるアネハツル

ム)をツルに装着させ、人工衛星を利用してツル類の渡りの追跡を行っており、日本に飛来するナベツル、マナツルの渡りを点から線でとらえることに成功した。この結果は一九九三年六月に東京および札幌で開催された国際シンポジウム「つると湿地の未来」で発表され(注)、国際的にも高い評価を受けた。このようにヒマラヤを越えるツルの渡りも科学的にかなり解明されてきている。

(注) このシンポジウムのワークシヨ

ップでは、国際ツル財団のM・ナゲンドラン女史による「インドからのツルの渡りの衛星追跡」(クロツルによる)の発表も行われた。

■ ツルを見にヒマラヤへ

さて前書きが長くなったが、三十五年もの間、常にツルのヒマラヤ越えに関心を持ってフォローしてきた私自身は、これまでこの目で一度もヒマラヤを越えるツルを見ていなかった。

そこで、本会の副会長退任を機に、

ツルを見るためのヒマラヤ・トレッキングの計画を立て、一九九三年九月十月にかけて、現地へ出かけることにした。パーティーは私と家内の二名、それにシエルパ、コック、キッチンボーイ、ポーター四名の計九名の編成であった。以下はその報告である。

本当はマナスルへ行きたかったが、マナスルはトレッキング・パーミットでは無理で、どうしても登山許可を必要とするというのであきらめ、カリガンダキを観察することにした。ツルを観察するベースとしては、一九六九年にドイツの鳥類学者J・マルテンスの隊が観察ポイントとしたダパ・コルへの途中

のヤク・カルカ周辺(四六〇〇〜四九〇〇メートル)とすることにしたが、カトマンズでは、トリブバン大学のオツルの専門家であるビレンドラ・スウォール氏からも観察場所についてのアドバイスを受けた。

一方、出発前には日本気象協会の奥山巖氏(本会会員でナムチャバルワの気象予報協力者)にも、ことしのモンスーン明けの予想を聞いてみたが、九月末の時点では、気象衛星による雲の写真では、カラコルムからネパールにかけて大ヒマラヤ山脈の南側に雲の帯があるものの、上空五〇〇mbは既に秋の気配であり、ツルは予想外に早く、十月上旬にはヒマラヤを越えるのではないかとのこと。この情報をもとにすぐネパールに発つことにし、十月一日にはポカラからジヨムソンに空路到着した。ジヨムソンに常駐されておられるムスタン地域開発協会の近藤亨氏によると、九月二十六日にツルの渡りの第一陣が南へ向かったが、まだ本隊は渡っていないということで安心する。

■ ついにツルの編隊と出会う

この日は、マルファの村に泊まったが、この日の午後、ついにツルの渡りの編隊を初めて垣間見ることができた。翌日は一二〇〇メートルの高度を一気に上がって、三九〇〇メートルのアル

バりにキャンプ、翌三日には四六〇〇メートルのヤク・カルカにキャンプを設営してツルの観察のためのベースとしたが、十月三日、三、〇一〇羽、四日、一、六八〇羽、五日、七、二九〇羽と、かなりの数のツルをかぞえることができた。カランクルン、カランクルンと鳴いて、仲間を呼び合いながらやってきて、この地点の上空までくると上昇気流をとらえ、編隊を解いて渦巻状に上昇し、再びV字型の編隊を組んで南へ向かう光景は、神秘的というほかなかった。

この地点から見ると、ニルギリ側、ダンパス側、頭上と、渡りのコースは雲の状態などの関係か、必ずしも一定していないが、午前十時頃になって南風が吹き、上昇気流による雲が始めると、ツルの渡りが始まるのを常とした。これは上昇気流を待つて飛んでくると高度を下げた。一方、夕刻になると高度を下げて飛ぶ群も目撃することができた。

このカルカは、ダウラギリ主峰のベースキャンプへの途中にあるため、高度順化に失敗した隊員が休養のため下りてくることもあり、ダウラギリの様子を聞くことができたが、今年の秋は日本からの二隊(横浜のベルニナ山岳会隊、長野県山岳協会隊を含む九隊が入っている)とであった。今年には

十月上旬の天候は安定していたので、登頂間違いなしと予測したが、後で聞いたところによると、私たちが最も多くツルを見た日の翌日(十月六日)、ベルニナ山岳会隊は登頂に成功したとのことで、ポスト・モンスーン期のツルの渡りと登頂時期との関連は、この地域に関する限り、かなりの確率で活用できることが裏付けられており、この点については大いに自信を持つことができた。

このようにして十月上旬の一週間の間に見たツルは、数えただけで一四、五〇〇羽、数え損なったものも加えると、約二〇、〇〇〇羽のツルが渡っていったものと推定される。

■美しい秋満喫のトレッキング

予想外に早くツルを見ることができたので、次のステップとして上流のカグベニ付近に転進して、ソバの畑に降りているツルを見ることにしたが、残念ながら今秋は天候がよくて雨が降らなかつたため、昨年(一九九二年)のようにソバの畑に降りているツルは一羽もおらず、空振りに終わった。

そこで十月十日、ツルの調査チームを解散してトロンパス下のチャバルブのキャンプから五名をジヨムソンへ帰し、後は我々二人とサーダー、ポーターの四名でマルシャンディを下ること

にした。

十月中旬の黄葉のムクチナートやナンボット、ピサンなどマルシャンディの上部は素晴らしい景色で、秋のヒマラヤ・トレッキングを十分に堪能することができた。またトンジェからの下流は、マナスルやヒマルチュリ登山当時を回想しながらの旅で、十月十九日無事カトマンズに帰着した。

このアンナプルナー一周のトレッキングコースは宿泊施設やレストランも整備された代表的コースで、欧米のトレッカーには人気があり、連日大勢のトレッカーとすれちがったが、残念なことには日本人にはほとんど会わなかった。なせ日本のトレッカーは十月の黄葉の美しい時期に出かけず、十一月に集中するのか、少し残念に思われた。

いずれにせよ、今回の旅は天候にも恵まれ、多くのツルを見ることができて満足いく楽しい旅であった。

十月上旬にカリガンダキにそのつもりで入れば、ツルと再会できることはほぼ間違いない。再訪を考えている今日この頃である。

「追記」アネハツルの北帰行(春の渡り)のコースは、まだはっきりと確認されていない。サテライト・トラッキング(衛星追跡)による調査が行われ、一日も早く解明されることを期待してやまない次第である。

自然保護随想
環境に関する
行動指針

小倉 厚

どうしたことか、大企業といえれば環境破壊・自然破壊の最たるものとして悪者扱いを受けることが多い。しかし公害問題が発生して以降の、企業の環境への対応ぶりは真剣そのものである。覚ましい成果を上げているのである。

例えば、生産設備を上回る環境機器が取り付けられたり、省エネ、省資源、リサイクル、緑化運動に限りなき努力を払っており、実際に工場内に立ってみれば実にきれいだ。その技術水準は世界のトップレベルにあり、海外からも高い評価を受けている。

定年後四年半、久しぶりで旧職場を訪れて、多少その仕事を手伝う機会を得た。私の元の職場は、例の大手町の経団連ビル内にある(旧日本鉄鋼連盟通称「鉄連」)である。公害問題発生以来、環境管理部という部署が設置され、当時もっとも多忙な部署だった。しかし、次第に問題が解決、クリアされていくにつれ、多忙さから解放されていくはずだと思っていた。しかし、世の中はこの私の空白の四年半のうちに、

公害問題から環境問題、それも温暖化を含む地球規模となって地球サミットが開催されたり、環境基本法が制定されるなど、単にわが国鉄鋼業のみに止まらず、発展途上国への環境技術の指導まで行う、相変わらず多忙な部署になっていった。

そこで目にした止まったのが表題の「環境に関する行動指針」だった。業界団体では初のものだという。

目下の環境問題の重要性に鑑み、「環境調和型社会の構築」と「地球規模の環境保全」への貢献を目的としたもので、それらを実現するための具体的対策として ①環境保全 ②省エネルギー ③省資源 ④製品の高付加価値化による省エネルギー・省資源 ⑤物流対策 ⑥オゾン層保護 ⑦革新的な技術開発 ⑧国際技術協力 ⑨海外事業活動における環境配慮 ⑩社会との共生、の十点をあげ、それぞれを強力に推進する方針だという。わがJACCの、山岳の自然環境保護とはやや異なるかもしれないが、企業も環境問題を真剣に取り上げている姿勢が伺えると思う。

今、鉄連の環境管理課長は私のかつての山仲間、そして私が仲人をしたという関係ではあるが、何も彼からPRを依頼されたわけではない。

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。



カット 中村あや

一通だけの 中村勝郎さんの手紙

望月達夫

神戸に在勤したのはもう四十年ぐらゐも古いことになったが、二年余の間に時々本会関西支部の集會に出たことがある。先ごろ亡くなった中村勝郎さんにお目にかかったのは、そんなあるときだった。

東京大学のキンヤンキッシュ登山が行われたのは、それから十年ぐらゐ経った一九六五年である。そして中村さんの子息、岳生君もその隊員の一人として参加し、不運にも約七二〇〇メートルの雪稜上で雪崩に巻き込まれ、ついに不帰の客となった。

当時『山岳』の編集者だった私は、鹿野勝彦氏によるこの登山隊の記録を見事な写真とともに、同誌61年号に載せた。中村さんご自身は本会の古い会員であると同時に、旧RCCのメンバーとして昭和初期には早くも尖鋭的な

登攀に励まれていたことを思い、岳生君のヒマラヤでの死に対して、数行の編者付記を記録の文末に付し、また些かのお悔やみを中村さんへの手紙に託したようだ。

先日古いものを整理していたら、その時中村さんからいただいた手紙（昭和四十一年六月五日付）が偶然出てきたので読み返してみた。

「（前略）神戸にご勤務のころからもう十年余にもなりますか（中略）今更早いものと思われます。日常の仕事に追われて自分では全く實際登ることから遠ざかっていまして、道具もすっかり息子に持ってゆかれてしまっていた次第でしたが、此の度の事故では思いがけないとも思ひ、また予期されないことでもなかったとも思ひ、自分の山登りがここで終止符をうたれた心地さえいたしました。キンヤンキッシュのフィルムを御覧になった由、私も去年秋ラッシュで見まして、この山の困難さを感じ、よくこれだけやれたものだと思ったわけで誠に貴兄の御意見の通り

です。再挙されるとしても雪や氷の着き具合で、たとえ天候に恵まれてもあのヤセ尾根がやれるかどうか、しかし今まであまり知られていなかったけれど、とにかく第一級の困難と素晴らしさを感じさせる山です。先発帰国者が待ち帰りましたカラスライドを当時見せてもらいましたが、頂上近い部分に息子が写したものでしたようですが、尾根と岩壁の見事なものには一緒に見た渡辺兵力氏とも全く何事も忘れて息をのんだものでした。（後略）」

私が中村さんからいただいた手紙はこの一通だけだろう。いただいたことすらもう記憶から消えていた。

中村さんの追悼は同時代の海野治良さんが、まことに行き届いた内容のもの新刊の『山岳』88年に書かれている。古い手紙を再読して岳生君遭難当時のことを思い浮かべた私は、私なりに中村さんを偲び、ご冥福を祈りたい。

秘境・チャクラギールの 北面に入る

伊藤 徹

一九九三年夏、山形大学・コーポルト会（旧制山形高校・山形大学山岳部OB会）の学術登山隊（川上隆総隊長JACC会員）は、新疆ウイグル自治区

の西端に聳えるコンゲール山群の無名峰（六七〇五メートル）（注1）に挑み、八月十六日に初登頂に成功した。私はこの支援隊に参加して、コンゲール山麓のカラクリ湖まで行ったのだが、全く偶然の機会から予定外の行動として、チャクラギール（注2）の北面・カクラグラに入る事ができた。チャクラギールはコンゲール山の西北方、ゲズ渓谷を隔てて聳える山群（約六七〇〇メートル）で、北面地域はこの八月まで外国人の立ち入りが禁止されていたのである（注3）。

八月二十六日、私たちはカシユガルに滞在していた。カラクリ湖（三六〇〇メートル）で隊員に高度障害があらわれたため、急遽予定を変更してカシユガルに戻っていたのだ。

その日の夕方、カシユガル登山協会のアスラ主任が彼の弟の結婚式に私たちを招待してくれた。ウイグル族の結婚の風習は非常に興味深いものがあったが、ここでは詳しく書く余裕がない。この時、アスラ主任が、私たちの明日の行き先としてすすめてくれたのがチャクラギール北面である。聞けば、つい最近解放されたばかりの地域で、緑の草原に森林があり、氷河の近くまで車で行ける、というのだ。数日前に、川上総隊長が一人で案内されているが、日本人パーティーとしては初めて入る



針葉樹林の中にバオが点在する

状、灌木状のものは乾燥きみの草地や砂礫地に生育し、高木状のものはトウヒ林にまじっている。はじめは別の種類かと思っただが、帰国してから確認したところでは略、什方枝柏(キダチアルタイビヤクシン)である。これは高木性または低木性で、匍匐性の新疆方枝柏(アルタイビヤクシン)の変種とされている。

ことになる。私たちがこの話にとびついたのはいうまでもない。
翌二十七日、私たちはトヨタの四輪駆動車二台に分乗してチャクラギールを目指した。パキスタンに通じる中巴公路が砂漠の中を一直線に延び、その遙か先に、左にコングル、右にチャクラギールの真白い山容が望まれた。途中、奥依塔克林場に寄り、一人三三元(六十円)の入山料を払う。「林場」とはわが国の森林事務所に当たるもので、現地政府により森林管理がなされてい

るようだ。
カシユガルから約三時間半、谷合いに開けた草原に着いた。草原には針葉樹林が広がり、林間には遊牧民、キルギス族のバオが点在する。正面にはチャクラギールの真白い北壁がそそり立っている。桃源郷とはこのようなところかと思う。高度計は二七五〇メートルを指している。
林学を専門とする私の興味は針葉樹林に集中する。樹種はトウヒとビヤクシンの仲間であることはすぐ分かる。トウヒ属のほうは、数日前に天山山脈の高山湖「天池」周辺で見たものと同じで、雪嶺雲杉(ゴダイサントウヒ)とその変種の天山雲杉(ムラサキゴダイサントウヒ)である。両者はよく似ているが、若い球果の色で区別できる。
ビヤクシン属のほうは、低木

ここで見た樹形の違いは、環境条件とくに土壤水分に適應したものであろう。私たちはナン(焼きパン)とハミウリの昼食をすませ、トウヒ林を抜け、氷河を見に行った。徒歩二十分あまりサイドモレーンの壁を怖い思いをしてトラバースし、氷河の舌端に這い上がった。空は抜けるように青く、チャクラギールの純白の巨軀が眼前にそそり立つ。雪崩が発生して、雪煙が斜面を駆け下った。両翼に白い羽根の見えるワシが一羽、針葉樹林の上を悠然と飛んでいる。素晴らしい景観だ。私たちは我を忘れて見とれるばかりだった。終わりに一言。チャクラギール北面はカシユガルから車でわずか三時間。今後は、氷河見物に大勢の人がやってこよう。観光地化した「天池」の二の舞にならないという保証はどこにもない。この『手つかずの自然』をそのまま残して欲しいと念願している。
*

(注1) 中国は今回の初登頂を記念して公式に「コクセル峰」と命名した。
(注2) 現地で聴いた発音はチャクラグルまたはチャクラグルである。
(注3) 一九八九年八月、明治学院大学山岳会は南側から入り、初登頂している。一九四八年に英国人・シプトンとテイルマンが入り、北稜を試登している。

山と自然の断章(七)

岡村治信

緊急避難

九州は大分・宮崎の県境にある祖母山系も、私の好きな山域である。その祖母山の頂上から尾平峠に向けて歩いていると、激しい雷雨に遭遇した。細い尾根道の両側は切り立つ急崖で、ここにも避ける余地がない。つい鼻先で猛烈なピカゴロが起り、手にしたピッケルの金具がビリビリと無気味に鳴った。生きた心地もなく、どこか安全な場所は……と祈るような気持ちで急に急いだ。運よく右手に恰好の岩穴があったので、夢中で入り込んだ。ホッと一息ついたのはよいが、すでに蚊やあぶや名も知らない昆虫類がいっぱいに飛び交っている。そこへいきなり名も知らない人類が大きなものを背負って入り込んだのだから、狭い岩小屋の中は大混乱。人類は雷公には刺されなかった代わりに、昆虫類の反撃にあつて、首や手を酷くくわれた。もちろん敵側にも累々たる戦死者を出し、血潮は流れて岩を染めた。このような緊急避難の場合はやむをえないが、しかし岩小屋は、昆虫という名の山岳民族の安全で楽しい社交場であり、避難場所でもあることを、よく心得ておきた

いものである。

■考える輩

ひとりて山へ行くときは、日常社会との接触を断ち、自分の生活の殻さえ捨て去って、文字通り一介のホモサピエンスとして、自然のままに漂うのである。

私がそんな企図を好むのは、どうい性によるのであろうか。心の奥に問いかけてもよく分からない。孤独を愛する、逃避、放浪癖、旅愁の虜、表現はいろいろあろうが、どれも当たらずとも遠からず、あるいは、そんな大袈裟なものでもなく、そんなもつともらしいものでもない。単なる気まぐれかもしれない。自分にとっては深い喜びでもあるが、また厄介な病気でもあるようだ。

そんなことを考えているうちに、この自分が自分にとって大きなお荷物になつてくる。それでも自然の美に陶醉し、山の深遠さに打たれているときにこそ、最も軽やかで透明な自分を感じるから、いよいよ不思議なのだ。そこで私は、いつもあのフランス・カレルの「人間、この未知なるもの」という本のことを思い起す。あらゆる視点、観点から人間を分析し、説明しようとしたこの名著の結論は、要するに「人間は謎である」。そう、私もまた謎の塊であることには違いない。でも、

だからこそ私はやはり「人間」であり、そしてパスカルが言ったように「考える輩」なのだ。

■天然の至芸

箱根山の中央火口丘の駒ヶ岳、その頂上にひそむ噴火口跡に、意外にも自然の造形美の極致を見た。その巨大な窪みは、全面ライトグリーンの芝生におおわれたスーパ皿だ。その真ん中に身を置けば、四周を取り巻く曲線は一切の装飾を廃し、円満具足の真円を描いている。そのスカイラインから足元に集まる曲面の優美な傾斜、そのなだらかさ、しなやかさ、しとやかさ。三百六十度すべて完璧、これ以上のパランス美はなく、これ以上の完成度は考えられない。

私の友人である山岳画家が絵筆をふるって、この景観を再現しようと苦心した。何回も描き直し、加筆し、修復したが、ついに満足できない。そのときに天の声が彼の耳元に囁いたという。「愛すべきドンキホーテよ、迷い苦しむがよい。汝はついに呉家の阿蒙にも及ばない」

今この噴火口跡は、ロープウェイ、スケート場、展望台などに占領されて以前の面影はない。この自然破壊の責任は、天の声を聞く耳を持たずに財力をふるった人にこそ帰せられるべきであらう。

ヨーロッパ・アルプスの山岳地図について

児玉 茂

およそ山岳地図に興味のある人ならば、スイス・アルプスの美しい地図に目を見張った記憶があろう。日本山岳会が所蔵するアルプス地図(九十二枚、「山」五八一、五八二号にリスト掲載)は戦後の官製のものが大半を占めているが、登山団体作成のものや、いわゆるジークフリート・アトラスなど歴史の意義を有する地図も若干含まれている。現行の地形図発行に至るまでの歴史を以下に概観しておく。

■一八五〇年代から作られた地図
アルプスの地図といっても「アルプス地域」としての地図はなく、フランス、スイス、イタリア、オーストリア、ドイツの各国別の扱いになるのは、組織だった官製地図(国家地図)が作られた開始の時期がヨーロッパ列強の領土再編、国家統一の時代であったためである。一八六〇年まで存在したサヴォイ公国や、一九一九年までオーストリア領だった南チロル地方は地図作成主体が変わり、地域が重複して描かれているという歴史がある。
一方アルプス登山のほうも山麓の人や、国際的に活躍する科学者たちに

よって始められ、主だった高峰は次々に登られてしまう。一八五〇年代末からイギリスを始めとして各国にアルパイン・クラブが作られた頃、国家ごとに官製地図は整備されつつあったが、アルプス地方にまでは十分には及んでいない状態であった。そればかりか小縮尺の概念的な地図にもまともなものはなく、登山や山地旅行の使用に耐える各山群別の地図を登山者や登山団体が作ろうと志したのは、自然の成り行きといえよう。

■フォーブスの実測地図

氷河学の先達の一人で、イギリス人としても最も早くアルプス登山を行っていたJ・フォーブスは、一八四二年にシャモニ背後のメールドグラス氷河域の実測地図を氷河観測のための基本地図として作っている。モンブラン一帯は当時はまだサルディニア王国の一部(サヴォイ)で三角測量は及んでいなかったし、ベースに使えるような実測図はなかった。緯度と経度が知られているのはモンブラン山頂のみである。そこで基線を氷河の舌端近くに引き、メールドグラス氷河に沿って三角測量網を奥へ延ばし、それぞれの基点から氷河表面の流動を計測している。同時に周囲の各峰の高度を計測し、地形を描いて地図化した(二万五千分の一)のちにE・ウインパーはこの地図のこと

海外の山

トモ・チェセンへの
ローツェ南壁疑惑

江本嘉伸

会報「五四六号」(一九九〇年十二月)で、「ローツェ南壁」の一文を書き、トモ・チェセンという希有なクライマーがなしたとげた「偉業」についてふれた。

「ヒマラヤ最後の難壁」とされた標高差三二〇〇メートルの垂壁を、当時三十歳のこのスロベニアの登山家は、九〇年の四月二十四日、たった一人で、荷上げサポートも酸素ボンベの助けも借りず、四十五時間ばかりで完登した、という話だった。

あの日から四年、実はチェセンの「初登攀」は、まだ霧につつまれたままであることを報告しなければならぬ。

日本では、「岩と雪」誌が何回かにわけて経過を追っているが、最初にクレームをつけたのはフランスのイヴァノ・ギラルディニだった。アルプス三大北壁を一冬で単独登攀したクライマーで、チェセンのマッターホルンやアイガー北壁の夜間登

攀に対しても、信じがたい、と言っている。

チェセンと同じ年の秋、シエルパのサポートと酸素の助けを借りてローツェ南壁を登ったロシアのクライマーたちもチェセンの登攀を信用せず、「自分たちが初登攀した」と表明した。

チェセンの完登の証拠として、当時(九〇年七月八月号)イタリアの「ヴェルティカル」誌に掲載された頂上からの写真が、逆にチェセンの行為への疑惑を大きくした。この写真は、左右を逆に印刷されていたことから議論を呼び、撮影者はチェセンではなく、別の時にローツェに登った同じスロベニアのヴィキ・グロシェリである、と判明したのである。

チェセン自身は、「自分が撮ったものとは言ったことはない」と弁明したが、なぜ写真を撮らなかつたのか、どうして発表した時にそのことをはっきりさせなかつたのか、という疑問が投げかけられ、それまではチェセンの行為を高く評価する立場だったラインホルト・メスナーも「信用できなくなった」と言いはじめた。ローツェ南壁は、八千メートル峰全山登頂をメスナーに次いで果たしたポーランドのイエジ・ククチカが

挑戦し、逝った壁である。

その壁を、本当にチェセンは登りきったのだろうか。

彼が、技術において第一級の凄いクライマーであることを疑う者はいないが、歴史的なビック・クライミングであるだけに、その検証が厳しい視点からなされるのはやむを得ないことだ。むしろ、そこにアルピニズムの健康さがある、といえるかもしれない。

ヨーロッパのクライマーたちの批判に対して、一九九〇年五月、つまりチェセンの登攀の直後、ローツェを通常ルートから登ったアメリカの二人のクライマーは「チェセンの登頂を信ずる」と表明している。頂上直下にオレンジ色の古い酸素ボンベを見た、というチェセンの証言が、アメリカ人の見たものと一致する、というのが、その理由だ。

このような論議は、日本の登山界には起こりにくいことだろう。それほど登攀はなかなかない、ということと、加藤保男や植村直巳のように、単独行でも証拠写真は工夫して必ず撮っているからだ。登山の真髄は、「正直」にあることをこの問題は、あらためて教えてくれている。

を当時の地図事情の中で「暗黒中っぽ」と光輝いている(注)と評している。

■レイリーのモンブラン山群地図

サルディニアは一八五二年には三角測量をアルプスまで延ばし、五万分の一の地図の発行を間もなく始めたが、山中に分け入らずに遠方から測量したものだったため、尾根や谷は非常に食い違っていた。

英国山岳会のアダムス・レイリーは、実用になる地図を作るべく、フォーブスの遺志を継いでモンブラン山群の地図を完成させている。フォーブスの基点から測量を開始し、山群を一周して各峰の位置を定め、名称を記載し、初めてこの山群の全貌が知られるようになった。一人の努力で作られたこの地図(縮尺はフランス官製地図に合わせ八万分の一、多色刷り)は英国山岳会で認められ、一八六五年に印刷発行された。アダムス・レイリーはさらにモンテローザの概念図(十万分の一)も作っている。

一八六〇年にサヴォイ公国を併合したフランスは、モンブラン山群やドイフィネ山群まで測量網の延長を開始する。モンブランの四万分の一、多色刷り部分図は一八六五年に刊行され、単色八万分の一のシリーズ地図が発行されたのは一八七〇年代であった。

■初めての実用地図「スイス山岳図」

関係各国がアルプスの実測図を次々に発行する時代になれば登山者は利用者となるわけだが、英国山岳会では一八六八年に実用的で正確な四枚組多色刷り「スイス山岳図」(約二十五万分之一)を数年以上かけて編集発行している。これはスイス政府発行の地形図(十万分の一、デュフル地図)と同時作成されていた信頼できる地図から編集されたもので、スイスの範囲を越えて東はオルトラー、南はグラン・パラディソも範囲に入っている。「アルプス地域」地図としては最初の試みである。

この実用地図に先だってJ・ポール編の『アルパイン・ガイド』がまとめられ、密度の高い情報を提供してアルプスは身近になり、また地図的概念ではなく部分の難易度を問題とする専門化した登攀の時代を迎える。

■スイスの「デュフル地図」と「ジークフリート・アトラス」

永世中立国となったスイスでは、国境確立のため一八三二年から組織的な地図作りを始めた。平地が少なく三角測量網を作るにも苦勞したが、山岳地方の地形測量はさらに困難で、予定の五万分の一、コンター付きの地形図は十万分の一のケバ式に変更されたいきさつがある。しかし地形表現には様々な工夫が凝らされ、最高水準の山岳地

図と評され、一八六四年までにスイス・アルプス全域を完成させている。責任者デュフルの功績を称えてアルプス第二の高峰モンテローザにデュフルシユピツツェの名が与えられている。しかし登山者にとってはこの縮尺ではもの足りず、五万分の一で描かれた測量原図に手を加えた登山用の地図が、スイス山岳会から八枚発行されている(二八六七～六九)。

欧州大戦後の一九二〇年代からスイス・アルプスに登り、日本の近代登山史を拓いた人たちが利用した地図はジークフリート・アトラス(多色刷り、五万分の一)と呼ばれるもので、現在のスイス山岳地形図の前身に当たる完成された美しさを持つものである。一八六八年からデュフル地図の測量基準を修正し、細部にわたって高度な最新技術を注ぎ込んで作られた新世代の地図といえる。アルプス登山開拓時代の人々は手にすることはできなかったが、逆に登山技術の向上が地図の完成度を高めるのに大いに役立った(発行は一八八〇年代から一九三五年まで)。ちなみに、日本山岳会所蔵のものは布で裏打ちされた折りたたみ式で、現在の地図より図郭が大きいものである。

■イタリア、オーストリア側の地図

イタリア側のアルプス地図のうち西部は「サルディニア地図」と呼ばれる

次代に残そう美しい山と溪

評判のよくない地図が一八五九年代に発行されているが、イタリアの国家統一の動きの中で、モンブラン、ドーフイネアルプス地域は一八六〇年にフランスに割譲されたことは前述した。アオスタの谷とグラン・パラディソ山群は小縮尺の英国山岳会「スイス山岳図」か、前時代的地図と評価されたサルディニア地図しかない(一八七一年まで発行)。統一イタリア王国としての測量は一八八〇年から始められる。そして一八八二年から発売された五万分の一は正確なようだが、今度は国境地帯が入手できないという問題があった。

北東部のロンバルディアは、オーストリアから一八五九年に割譲されたがそれ以前にオーストリアによって「ロンバルディア／ベネチア王国地図」(八万六千四百分の一、一八三三～三八年ミラノ発行)が作られていた。谷が一般に広いという条件もあって、測量の正確さに大きな問題はないが、地形表現が稚拙で不鮮明な印象を与える。この地図は統一後のイタリアで複製されたようである。

かつての南チロル、現在のトレンチノ／アルトアディゲ地方の地図化はオ

ーストリア帝国官製地図(七万五千分の一)の一部として一八八〇年代には完成している。地形表現の欠点はロンバルディア／ベネチア地図を引き継いでいるといわれ、地名表記にも問題があるとはいえず、ではよいとされる。領域は広大でドイツ南部も含んでおり、いわゆる東アルプス全域がカバーされている。

■美しいAV年報の折り込み地図

東アルプスの主な山群については、オーストリア帝国時代からドイツ・オーストリア山岳会(山岳連盟)が独自の測量により地形表現の詳細な地形図(五万分の一および二万五千分の一)や概念図(十万分の一)を作成、発行していた。山岳連盟(Alpenverein)はクラブとは性格が異なり、会員数も多く登山活動の全般にわたって専門家が主導する。山小屋の建設と経営、山岳地図の作成、ガイドブック作成、氷河など科学的研究への援助、協力等を活発の中心においている。AVの年報は一八六五年から発行されて、東アルプスを舞台とした登山記録と科学調査が同じウエイトで扱われている。山岳地図(AV-Karte)作成の歴史も創刊号

から始まっており、オーストリアの名山グロースグロックナーなどは繰り返し地図化されている。

折り込みの地図として実際に利用できるものは一八九〇年代からで(年報の版も大きくなる)それらは増刷されて一般販売されている。イタリア・アルプスのオルトラー(一九〇七年)や

アダメルロ(一九〇三年)、ドロミテ(一九二五年)の地図は現在は販売されていないが、古いAVの年報を開いて、それらの美しい地図が折り込まれているのを見つけるのは楽しいものである。

注・『アルプス登攀記』第十一章
モンブラン山群の諸登攀

山と医療

病を癒す アシュヴィン 双神

堀井昌子

ヒンドゥー教は多神教であるから、「病を癒す神様」がいるにちがいないと思って書物を開いたところ、このアシュヴィン双神にめぐりあった。ヒンドゥー教の前身であるバラモン教の聖典をヴェーダというが、これには、前一二〇〇年から前一〇〇年にかけて編纂されたとされるリグヴェーダに始まる四つのヴェーダがあり、最後にできたアーユルヴェーダがインド伝承医学の代名詞となっている。

アーユルヴェーダは伝統的に天から啓示されたものとされ、創造主のブラフマーからブラジャーパティ、

アシュヴィン双神、インドラ神へと口伝によって受け継がれたものであるが、このアシュヴィン双神と名付けられた双生児の神はリグヴェーダにおいて最も著名である。すなわち五十以上の完全な賛歌で賞賛され、その名前は四百回以上も出ているのである。彼らは老人を若返らせ、安産と無痛分娩をもたらし、足をなくした者には義肢を与え、火傷を治療し、豹による咬傷を癒す。そして、彼らは人間にとって卓越した医師であると同時に、神々にとっても信頼すべき医師であった。神々自身が医療の助けを必要とするときには、神々はアシュヴィン双神のもとに走らなければならないのである、云々。

山登りにおける「アシュヴィンス」たらんという願望をもって、医療委員会にいただきましたスペースを埋めてゆきたいと考えております。

花咲く丘に涙して

坂倉登喜子

昨夏の第十七回ヨーロッパ・アルプス・ツアーで最初に訪れたシャモニーでは、ラックブランとミディ展望台へ行ったが、観光客の多いのに驚いた。モンブランやシャモニー針峰群の展望は幾度も見たが、今回も天候に恵まれ、終日シャモニーの山々に向かって、刻々と変わる雲の動きを捕らえて、カメラのシャッターを切った。

翌日はツェルマットに移動して、毎年訪れるオーバートホルンの斜面で、今回も咲き誇るエーデルワイスの群落に出会い、山をバックに花を前景にして思い切り撮り歩いたが、どの花を写してよいか戸惑うばかりに咲き揃って、うっかりすると踏みそうであった。

私はこの花の咲く丘に座ってマッターホルンを眺めながら、メンバーたちが皆懸命にエーデルワイスの花を撮っている姿を見て、とても嬉しく思った。その時同行の女性の一人が「坂倉さんにエーデルワイスの歌を捧げます」と言って、フルートで吹奏してくれた。私も小声で一緒に歌ったが、何か込み上げてくる喜びが胸に響き、涙が流れてしばらく、眼がボーッと霞んでしま

った。

この間、NHKのラジオ番組、『深夜便』で「エーデルワイスに魅せられて」というテーマでエッセイを五回放送したが、第一回はエーデルワイスの歌だった。確か次には「花咲く丘に涙して」の曲が流れた。まさにその曲の如く、捧げてくれた笛の音に私は感涙した。

花咲く丘といっても標高三〇〇メートル近い斜面なので、そこからスネガまでは二時間くらいかかる。午後二時頃下山支度をしていると、急に風が吹き始め、霧雨が降り出してきた。

林道を歩く頃は雨も止み、スネガから地下ケーブルでツェルマットに下り、ねずみ返し旧家の間を通過して街に出た。道の途中に袋が下がっていたので、食べ残した昼食のパンなどを入れてきたが、これはスイス独特の方法で、家畜の餌にするのだそうだ。捨てるより得策、と思った。ツェルマットの街は、ゴミを捨てないから拾う人もなく、窓辺は花々で飾られ、道行く人は登山スタイルの岳人が目についた。

山岳博物館は今回も、夜特別に開館していただいで見学することができた。

最後のミューレンでは、最終日にアルメントフーベルの丘で青空パーティーを催し夜はお別れ会で合唱して十二日間の「花と氷河」の旅を無事終わった。

図書紹介



カット 中村あや

牧潤一著 『レッツ・スケッチ 山の絵教室』

本書は本会会員牧潤一氏による、初心者を対象にした山の絵の技法書である。以前ある会で、持参の小さな楽器を吹いて皆を楽しませた牧氏の姿を思い出す、そんな温かみのある人柄がこの本にも現れている気がする。

内容はスケッチからペン画、パステル、水彩、油絵と多彩である。「私は水彩だけでたくさんだと思っておられる方々にも、是非油絵だけは一度描いてみていただきたいものです。油絵を描くことによって、絵を築き上げるという感覚が身に着くことでしょう」と強調される。

山の絵に対する思いは、取り上げられている山に海外の山が多いことや、作品、コメントからも伺うことができているが、この思いは、あとがきに簡潔に

まとめられている。「自分の手で対象ーときには想像ーを写したり、表現したりすることに、人間はもともと興味を持っていてに違いないのです。しかし単に対象を写そうとする行為であっても、そこに創意・想像などという、より人間の精神を高めたり深めたりする種類のものも、無意識のうちに組み込まれてくるのです。これからはそのような考えをより深めながら、今まで同様、山に登り、山を眺め、絵を描き続けていこうと思っています」と。

一九九三年七月 日貿出版社発行

二、二六六円(税込) (三栖寿生)

不破哲三著

『回想の山道』

―私の山行ノートから―

回想の山道という題名が示すように著者の若い頃からの山行記録を、雑誌「文化評論」「グラフこんにち」に随時掲載したものを一冊にまとめたものです。

第一章では私のふみあととして、学生時代の登山、山を楽しむために丹沢に山荘を建てたいきさつなどを、総論的に書いています。

第二章から第七章までは、いままで登った山行記録を地域別にまとめています。

日本共産党委員長という、恐らく激務の職にありながら、丹沢、奥多摩、秩父から、八ヶ岳、南アルプス、富士山と、幅広く山歩きをしている様子に驚かされました。

B6判 山と溪谷社発行 一、四〇〇円 (茂見 猛)

石原きくよ著

『山を想えば人恋し』

―北アルプス開拓の先駆者
百瀬慎太郎の生涯―

登山の黎明期、北アルプスに深くかわり、日本登山史上に残る人々との親交を重ねながら、自身も山の先駆者として山とともに生きた人、百瀬慎太郎の生涯をつづった本である。

当時の登山はどんな人たちによってどのように登られていたのか。ウォルト・ウエストン、辻村伊助、横有恒、石川欣一、伊藤孝一等等、大勢の高名な登山家が登場する時代の様子は興味深い。

また、氏は大正六年には大町登山案内者組合を結成して、地域にも尽力している。

著者は膨大な資料を集め、また直接親交のあった人々や親族から、その人となりを探り出しているが、その努力は大変なものだったと思う。牧水門下

でもあった慎太郎の短歌も数多く集録され、その方面に関心のある人にも興味深く読めると思う。
巻末には詳しい登山史年表が収録されている。

一九九三年五月 郷土出版社発行
二一ページ 一、六〇〇円 (渡辺玉枝)

ジョン・ミューア著／岡島成行訳 『はじめてのシエラの夏』

著者ジョン・ミューア(一八三八―一九一四)は、アメリカの自然保護運動の元祖として、また山岳団体および自然保護団体として名高いシエラ・クラブの創立者、さらにはアメリカの国立公園法の提唱者としても著名で、アメリカ山岳会の会長を務めたこともあった。

開拓時代のアメリカ西部にあって、教養人として早くも自然保護の立場で大自然の景観、そこに棲息する動植物を深い愛情を持って数多くの著作を通じて世に紹介し、自然保護運動の啓蒙に努めた。

本書は一八六九年、著者が三十一歳のとき、ヨセミテを含むシエラ・ネヴァダ山中で羊飼いたちと過ごしたひと夏の旅行記で、一九一一年に発行されたもの。きめ細かい自然描写もさるこ

とながら、当時既にヨセミテ溪谷などを訪ね歩いていた観光客の思慮の浅いふるまいや、無教養な羊飼いたちの言動などについての苦言なども興味深い。ミューアの著作の邦訳本としては「アラスカ探検記」(戸伏太兵衛・聖紀書房昭和十七年/原著「Travels in Alaska Houghton, Mifflin, 1915」)について二冊目。訳者は本会会員。

この種の紀行文を楽しむものにももう少し詳しい地図、または概念図が欲しいところだが、最近山岳会の図書室に納入された原著の Penguin Books 1987年版にも地図の類は一切なかった。

宝島社 一九九三年九月 一、六〇〇円 (越田和男)

石田稔郎著
『韓国 の岩場』

登山愛好者が国民五人に一人の割合といわれるほどの韓国では、各地にある登山学校も盛況ということだ。

現在、若い人たちに好まれるのは岩登り、それも、フリークライミングの技術習得への意欲が高いと聞いたが、当書は韓国登山学校同窓会の調査研究委員会作成のリポートに基づいて、ソウル近郊の北漢山の仁寿峰、道峰山の仙人峰、また、雪岳山の蔚山岩の代表的な登攀ルート図とグレード、所要時

間を紹介しており、彼地で岩登りをする場合には便利なハンドブックになるといえよう。

一九九三年十月一日発行 五一ページ
ルート図三枚 写真五葉 自費出版のため頒価一、〇〇〇円(送料込み)著者に直接申し込またい。
(松永敏郎)

Edited by T.C. Trzyzna
World Directory of Environmental Organizations 1992年(第四版)

これは世界中の環境保護組織についてのハンドブックである。非営利的な出版物の California Institute of Public Affairs, Sierra Club および IUCN(International Union of Conservation of Nature) の三団体の援助でできた本である。

本を開けると、まず「Please Help Us」という文字が目に入る。これはなるべく多くの情報を編集者に寄せてほしいとの呼びかけで、連絡先が書いてある。

内容は七つに分かれており、①このハンドブックの目的と使い方 ②項目別の活動状況 ③世界の地域別の活動状況 ④国連のシステム ⑤その他の国際的な活動 ⑥国際的な非政府組織

(NGO) ⑦国別の環境保護組織のリスト、に分かれている。それらの範囲は非常に広く、放射能から水や空気の問題まで、すべての環境問題を対象としており、山岳問題もその一つとなっている。それぞれの団体について、い

つから活動しているか、出版物はあるか、および連絡先がファックス番号まで載せてあり、連絡をとるのに便利になっている。また、世界中の環境問題のこれまでの主な催しも載せてある。California Institute of Public Affairs: P.O.Box 189040, Sacramento, Cal., 95818, USA (45\$) (澤井政信)

小泉武栄著
『日本の山はなぜ美しい
—山の自然学への招待—』

魅力的なタイトルの本が出た。しかし、この本は風景論の本ではない。日本アルプスの高山帯の自然景観の成り立ちを自然科学的に、しかしわかりやすく説明したものである。著者は自然地理学を教えている大学教授であるが生態学会でも活躍しており、自然保護の運動家でもある。

日本の山はなぜ美しいか。著者のまじめにしたがえば、日本の高山帯の景観が「きめ」細かいモザイク状の複雑なパターンを持っていることによる。

そして、これをもたらした原因は、山頂現象、複雑で細かい地質、さまざまな斜面の形成時代、の三つである。著者は学生時代以来の山での調査の足跡を振り返りながら(主な舞台は木曾駒ヶ岳と白馬岳)、さまざまな高山植物がなぜそこに存在するのかを、地質のちがいや斜面状での礫の動き、斜面の形成時代と関係づけて順序よく説明してゆく。高山での野外調査がどのように行われ、新発見がどのようになされるかという、あまり語られることのない舞台裏が描かれている。

内容的には著者の博士論文をまとめたものであるが、気負いのない読みやすい文章は好感がもてる。木曾駒ヶ岳、白馬岳の自然観察ルートマップ(多色刷り、縮尺一万七千分の一)がついているのでザックにしのばせて行き、著者の主張を現地確かめてみたい。

四六判 一九九三年八月二十八日
古今書院発行 二四〇ページ 二、六〇〇円 (岩田修二)

■資料委員会からのお知らせ■

これまで登山用具、記録など資料の寄付をお願いしていましたが、整理、保管の都合上、寄付はしばらく休止させていただきます。長い間ご協力くださいましてありがとうございます。

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

秋田支部

秋山山行 皮投岳から竜ヶ森へ

北林山の山行は、当支部の北林嘉鶴
子会員の歳祝いの、とっておきの山と
して数年前から計画していたのだが、
なかなか実現をみず、今年は北林山に
隣接する岩手県境の皮投岳（一一二二
メートル）を、秋山山行の山に決めた。

十一月三日、快晴の鹿角市街から田
山へ通ずる県道を走り、花輪越えから
入山した。登るにつれてヤブが濃くな
り、県境に達した頃は完全に踏み跡も
消え、猛烈なササヤブとなる。

行動をいったん中止して、ヤブの中
で早めの昼食をとったが、晴天に気を
よくして、急遽、帰路上の鷹巣町にあ
る竜ヶ森（一〇五〇メートル）に鈍先

を変更。近年新設された竜ヶ森の寒沢
コースは、三十分ほど登れるとあっ
て、登山口に向かったが、林道が予想
以上に長く、登山口についた頃はすで
に四時。希望者のみが登ることにし、
ブナ林の尾根を一気に登って、薄暗く
なった山頂に達した。

当支部山行は、忘れ去られている県
内の山々を主として選んでいるが、本
年、烏帽子岳（雄勝町）、東山（東成
瀬村）、黒森山（大内町）の三山に登
山道が新設され、ますます楽しみが増
している。

【参加者】岡田光行、藤原健、加賀谷
昭一、高橋守、小笠原義雄、柳田勇悦、
大山健助、加賀谷立身、斎藤恵子、鈴
木裕子、佐々木民秀、今野秀穂、会員
外二名。
（佐々木民秀）

東海支部

支部ルームを開設

待望の支部ルームが昨年十一月六日
O M Cビル（尾上機械(株)）地下一階に
開設されました。床面積は約二十五坪
五十名ぐらいの集会ができます。

役員会、委員会、支部友会など各種
集会に利用できます。支部員からの備
品の寄贈で設備も整い、図書室も設置、
少しずつ内容も充実され、支部員の活
動の拠点として期待されています。

交通は、地下鉄「東別院」下車、前
津通りを北へ徒歩五分。または地下鉄
「上前津」駅下車、前津通りを南へ徒
歩五分。O M Cビル裏の専用出入り口
を地下へ。O M Cビル南西に新設され
たクライミングウオール（高さ十七メ
ートル）を目標にしてください。
〒460 名古屋市中区富士見町八一八
O M CビルB1
☎ 〇五二―三三三―八三六三
（鈴木常夫）

『東海山岳・六号』を発行

八年ぶりに『東海山岳』が刊行され
ましたのでご案内いたします。

ガウリシャンカール峰、雪蓮峰、シ
ャパンマなどの登山報告をはじめと
して、中高年の高所登山、登山医学、
トレーニングなど中年問題にも多く
のページをさいています。

内容は、国内外登山の記録、研究、
国内外の紀行、随筆、年表と多岐にわ
たっています。ご一読いただければ幸
いです。

A五判 四〇三ページ カラー写真
八ページ 定価三、〇〇〇円（送料
別）

〒443 蒲郡市竹谷町内山六八一六 鈴
木常夫まで葉書でお申し込み願います。
（鈴木常夫）

一九九五年 マカルー峰登山隊 隊員募集

日本山岳会は、一九九五年春にチ
ベット側からのマカルー峰の登山許
可を取得しました。この登山は、創
立九十周年事業の一環として、三月
初旬から五月末にかけて、未踏の東
稜からの登頂を目指します。

詳細につきましては、現在高所登
山研究委員会のマカルー小委員会
計画立案中です。そこで、常日頃か
ら山登りに精進されている会員の方
への参加を募ります。参加ご希望の
方は、左記の要領で、高所登山研究
委員会マカルー小委員会へ応募して
ください。自薦、他薦を問いません。

■参加申し込み要領■

- 一、氏名・会員番号
- 二、生年月日
- 三、自宅住所・TEL
- 四、勤務先名・所在地・TEL
- 五、登山歴（国内外を問わず、年代
順に山名・ルート・到達地点・
担当等を記載）

一〜五の各項目について、できる
だけ詳細に記載（書式は自由）し、
三月十日までに応募してください。

日本山岳会会長 藤平正夫

書籍・雑誌 受入報告 1993年11~12月

著者	書名/雑誌名	ページ・版型	出版元	出版年	寄贈/購入別
長宗清司	琵琶湖周辺の山：うり坊の足跡	268 pp/20 cm	ナカニシヤ出版	1993	著者寄贈
岡田日郎	四季折々の山：名山・秀峰へのガイド紀行	223 pp/20 cm	東京新聞出版局	1993	出版社寄贈
ピアリー	北極点 (訳：中田 修)	292 pp/24 cm	ドルフィンプレス	1993	訳者寄贈
建設省国土地理院(編)	自然地名集：20 万分の1 地勢図基準 (平成3年版)	716 pp/26 cm	日本地図センター	1991	購入
The Alpine Club	The Alpine Journal 1993 : Everest 40th Anniversary	363 pp/23 cm	The Ernest Press	1993	発行者寄贈
八杉貞利	岩波ロシア語辞典 (増訂版)	1599 pp/17 cm	岩波書店	1973	水野勉氏寄贈
Smith, C et al. (eds.)	Diccionario Moderno Langerscheidt (英西辞典)	502 pp/19 cm	Langenscheidt Mangold	1966	水野勉氏寄贈
城所邦夫	登山者のお天気学 (エーデルワイスブック No. 3)	201 pp/18 cm	山と溪谷社	1993	著者寄贈
大西 宏	遠く高く：大西宏遺稿集	621 pp/22 cm	悠々社	1993	編者寄贈
田畑真一	W. ウェストンの信濃路探訪：山々への賛歌	207 pp/20 cm	センチュリー	1993	著者寄贈
増永迪男	霧の森：ふくいの山・四季	175 pp/20 cm	ナカニシヤ出版	1993	著者寄贈
小川忠邦	我が故郷の山々：若き日の山行より	169 pp/21 cm	山路書房	1993	著者寄贈
石田稔郎	韓国の岩場 (ルート図と岩場ガイド)	52 pp/19 cm	私家版	1993	著者寄贈
田淵行男	田淵行男作品集 Vol. 1 (山岳写真集)	63 pp/19 cm	田淵行男記念館	1993	発行者寄贈
山村正光	中央本線各駅登山：高尾～松本間各駅からの山歩きガイド	173 pp/21 cm	山と溪谷社	1994	出版社寄贈
石浦邦夫	青いケシを訪ねて：中国四川省 巴朗山峠	59 pp/18 cm	私家版	1993	著者寄贈
岩科小一郎	山ことば辞典：岩科山岳語彙集或	194 pp/20 cm	百水社	1993	出版社寄贈
大内尚樹 (編)	秘境の山旅 (現代人にとって秘境とは)	246 pp/20 cm	白山書房	1993	出版社寄贈
石井光造	心に残る山：静かな山の紀行集	206 pp/20 cm	白山書房	1993	出版社寄贈
明大チャモランマ 峰遠征隊(編)	チャモランマ・カンシュン谷周辺の地形： 学術班報告書	40 pp/26 cm	明大チャモランマ 峰遠征隊	1993	発行者寄贈
福岡ムスターグ・ アタ登山隊 (編)	ムスターグ・アタ報告書：Muztagh Ata 7,546 m	118 pp/26 cm	福岡県山岳連盟	1993	発行者寄贈

* No. 583, 12月号掲載の10月受入図書のうち、岡村治信氏・著書名は「山と法服」でした。お詫びして訂正致します。

・会務報告

十二月定例理事会

日時 十二月十六日(木) 十八時五十分～二十時三十分

場所 日本山岳会会議室

出席者 藤平会長、嶋原、中村各副

会長、小倉、大倉、大森、村井、山口、

南川、松浦、伊藤、水野、南井、堀井、

渡辺、溝口、中川各理事、中島、川崎

各監事、斎藤、西村、宮下、重廣、神

崎各常任評議員

〔委任〕片岡、山本各理事、湯浅常任

評議員

◆議 事

〔審議事項〕

一、日本大学チヨモランマ登山隊一九

九五の後援要請について 神崎

創部七十周年を迎え、未完登の北東

稜からの登頂を目指す。承認

二、シルバートートル・ダウラギリ一

九九四隊の後援要請について 神崎

今回は全員がJAC会員で、九四年

秋の登頂を目指す。承認

三、山研改策特別委員会の会計報告と

解散について 溝口

会計報告は、全会員に周知させるこ

とを自転車振興会からも要請されてお

り、「山」一月号に掲載する。委員会

は十二月四日、会計報告、総括して解

散した。承認

四、海外登山基金について 嶋原

現在二隊が申請。締切りは十二月末

日で、平成六年一月十二日に審議し、

同二十日の定例理事会で報告する。支

給額は二百五十万円である。

五、六年度予算の要求について 大倉

各委員会担当理事は、二月一日まで

に事務局に提出のこと。

六、寄付金について 中村

中川喜久雄会員から百万円の寄付が

あり、長期計画準備金に入れる。承認

七、JACマカール登山隊・一九九五

について 渡辺

①十二月三日高所登山研究会を開き、

東稜ルートを研究。②文部省スポーツ

振興基金申請の作業に入る。③事務所、

基金、企業協賛、後援等については一

二月理事会で提案する。承認

〔報告事項〕

一、青森支部設立総会について 小倉

十一月二十日、藤平会長、松田前副

会長、小倉常務理事、宮城、秋田、岩

手各支部から五名ずつ、青森支部から

松島支部長以下二十二名が出席して設

立された。

二、年次晩餐会、懇親山行 中川

十二月四日、新高輪プリンスホテル

で開催。出席者六百四十一名。三笠宮

寛仁親王殿下がご出席になった。アル

パイン・スケッチクラブによる絵画展

が開催された。翌五日の懇親山行は丹

沢の弘法山で行われ、参加者百十名と

盛況であった。

三、青登懇について 中川

平成六年二月二十六～二十七日、八

王子市大学セミナーハウスで「若い人

たちにとって魅力のあるJACとは」

のテーマでパネル・ディスカッション

を行う予定。

四、チベット登山協会から四団体へ募

金要請について 小倉

十二月十日、本会ルームで日山協、

ヒマラヤ協会、長野県山岳協会、JAC

の四者打ち合わせ会議を行った。本

会から小倉、村井両理事が出席。

五、『山岳』について 南川

発行部数は五、六四〇部、二〇〇部

はナムチャバルワ関係に配布。

〔各委員会報告〕

●科学研究委員会 十二月十一日、青

山学院大学で第二回「雪崩シンポジウ

ム」を開催。参加者六十七名。

●自然保護委員会 鳥海山南麓スキー

場開発問題に関連し、山形支部の佐藤

会員がイヌワシ生息調査を行っている

が、これを側面から援助していく。

●自然保護専門委員会 「山の自然学

現地調査」は百名以上の申し込みがあ

る。十一月二十八日は品川で第二回講

座、十二月十二日は三頭山で第三回を

行った。六十四名参加。月一回の開催

で一年間続ける予定。

●図書管理委員会 ①日本テレビに対

し、小島鳥水関係の図書を貸し出した。

十二月十三日放映。②東海支部のルー

ムが完成したのにもない、重複本を

預託したい。この内容については、目

録を次期理事会に提出したい。将来は

ともかく本部の図書として管理する。

(理事会承認)

●資料委員会 十一月十三日、中川喜

久雄会員の講演会を開催。二十名出席。

また、同会員から書籍の寄贈を受けた。

●フィルム委員会 ①フォト・ビデオ

クラブ主催の写真展(十一月二十～二

十九日・新宿三省堂ホール)を応援。

②一月二十一日、スキー映画会を予定

している。

●図書委員会 北大山岳部部報・7を

名誉会員故辻莊一氏ご遺族から寄贈を

受けた。これは当会図書室の欠番であ

ったもの。

●青年部 十一月十五日、第七回青登

懇打ち合わせ、他三件報告。

●学生部 十一月十四日、マラソン大

会、十二月三日、クライミングコンペ。

●海外連絡委員会 十二月十日開催し

「訪台交流登山隊」の募集要項(平成

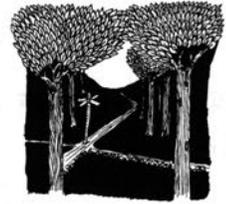
六年四月十八～二十三日、雪山および

合歓山等)を会報一月号に掲載するこ

とにした。

●新入会員承認 鯉坂青青他二十六名。

INFORMATION



カット 窪寺健之

◆第二十五回・山岳図書を語る夕

図書委員会

今回は山口裕一氏が自著を使って、地図と風景スケッチをテーマに開催します。ぜひ参加ください。

演題 「地図を使った風景スケッチ入門」山と渓谷社刊

講師 山口裕一

日時 三月二十五日(金) 午後六時半
場所 日本山岳会集會室

◆シンポジウムとコンサート
山の自然保護を考えるⅡ

自然保護委員会・丹水会

首都圏の山として親しまれてきた丹沢は、最近、ブナの立ち枯れやニホンジカの危機が問題になっていいます。そこで、地域の人々と一緒に、山の自然保護について考えてみたいと思います。
日時 四月十六日(土) 午後一時十五分～四時十五分(入場無料)

場所 秦野市文化会館小ホール

神奈川県秦野市平沢八十二番地

☎〇四六三一八一―一二二一(代)
小田急秦野駅よりバス⑨⑩⑪⑫
で文化会館前下車

プログラム

①ミニコンサート「ザ・丹沢」

出演 佐野民枝 岩崎早苗とアンサンブル・ベレッツァ

②シンポジウムと会場発言

「山の自然保護を考える」
パネリスト

森 美文(日本自然保護協会)

西郷公子(神奈川新聞記者)

奥野幸道(日本山岳会)

*当日、左記の山行を計画しています。

Aコース 四月十六日午前九時三十分

秦野駅前集合。渋沢丘陵を歩いて会場へ。

Bコース シンポジウム終了後、丹沢

ホーム(札掛)に宿泊。翌十七日

は観察山行(丹沢山一塔ノ岳)またはスケッチハイクを楽しみます。実費負担。

申込 葉書にA・Bコースを明記の上

三月二十日までに山岳会自然保護委員会へ。詳細を連絡します。

*もちろん、シンポジウムのみの参加も大歓迎。お誘い合わせの上、多くの方のご来場をお待ちいたします。

*この催しは丹水会と共催です。丹水

会ではシンポジウム終了後に、春の例会を予定しています。

◆会報「山」の編集について懇談会

会報編集委員会

会報は、全国の会員をつなぐ大切な

「場」です。読みやすく、楽しい会報を目指して日々の作業を行っています。

さらによりよい会報作りのために、会員諸兄弟のご意見をお聞かせください。

多数のご出席をお待ちします。

日時 三月十一日(金) 午後六時半
場所 日本山岳会集會室

◆山スキー講習会

指導委員会

次の日程で山スキーの講習会を行います。

① 妙高三田原山から火打山 三月二十

六～二十八日 テント泊・自炊。

② 八甲田山 四月九～十一日 往復飛行機利用 ホテル泊。

参加ご希望の方は、ルート名を記入の上、指導委員会宛て、ご連絡ください。詳細な計画と申込書を送付します。

■会員異動

▼物故 金井五郎(七一八六) 12・16
岩下莞爾(四八三五) 12・19 橘真琴

(一一七七七) 12・25 ▼終身会員 石坂昭二郎(四〇三七)

・ルーム日誌

(12月)

- 1日 青年部
- 2日 学生部 自然保護専門委員会
- 3日 高所委員会
- 7日 図書委員会
- 8日 フォトビデオクラブ
- 9日 学生部
- 10日 海外連絡委員会
- 13日 アルパイン・スキークラブ
- 14日 二火会(旧女懇) 科学委員会
- 15日 三水会
- 16日 常務理事会 理事会
- 18日 自然保護専門委員会
- 20日 資料委員会
- 21日 フィールド委員会
- 22日 自然保護委員会

12月来室者512名

日本山岳会会報 山 585号

1994年(平成6年)2月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102 東京都千代田区四番町
5-4 サンビュウハイツ
四番町
TEL 東京(03) 3261-4433
振替口座 東京 3-4829
発行者 藤平正夫
編集人 伊藤 敏
印刷 株式会社 技報堂